

ノロドム・シハヌークの亡命生活（特集 亡命する政治指導者たち）

著者	チアン バナリット
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	209
ページ	2-4
発行年	2013-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003769

ノロドム・シハヌークの
亡命生活

チアン・バナリット

一九二二年一〇月三十一日、ノロドム・シハヌークは、カンボジアの王族ノロドム・スラムリットとシソワット・コサマック妃の嫡男として、首都プノンペンに生を受けた。一九四一年四月二十三日当時の国王シソワット・モニヴォンが逝去し、同年一〇月二十八日、一八歳のシハヌークは、フランス植民地統治下のカンボジアで国王に即位した。

一九五三年一月九日、シハヌークの確かな統率力と巧みな外交手腕により、カンボジアは武力闘争に大きく傾くことなくフランスからの完全独立を実現した。そして即位からほぼ二年後、シハヌークは父ノロドム・スラムリットに王位を譲り、それまで以上に積極的な政治活動を開始するとともに、より現代的な国家体系の成立をめざしてカンボジアに選挙制度による民主主義を導入した。一九五五年九月、初の議会選挙で圧倒的な勝利を収めて首相に就任。

さらに一九六〇年、父である国王の逝去の後に実施された総選挙での大勝により、シハヌークは国王ではなく王子としての立場のまま国家元首の座に就いた。自らの政権下で、シハヌークはサンクム・リアハ・ニヨム（人民社会主義共同体）を結成、中立的な外交政策によりカンボジアに東南アジア屈指の平和的繁栄をもたらした。

しかし不運なことに、当時のカンボジアには中立政策を堅持しつつ同時に東西冷戦の余波を免れつつけるだけの力はなかった。共産主義国と資本主義国の間で繰り広げられる激しい主導権争いは、やがてカンボジアをも巻き込み、一九六〇年代終わりのインドシナ戦争へと突入していった。米国の後ろ盾を得た南ベトナムにより脅かされつつあったカンボジアの国家主権と国土を守るべく、シハヌークは、中国、北ベトナムとの関係緊密化をはかる。しかし一九七〇年三月一八日、米国の支援を受け

たカンボジアのロン・ノル将軍が率いるクーデターにより、モスクワ訪問中のシハヌークは国家元首の地位を追われた。この時から、シハヌークは中華人民共和国（PRC）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮：DPRK）で長い亡命生活を送ることとなる。亡命生活中にも、シハヌークの活発な政治活動は止むことなく、中国、北朝鮮両国の指導者たちとの間に、政治的、個人的に緊密で確かな関係を築いていった。

この亡命生活は、シハヌークにとって政治と外交術の基本を身につける恰好の機会であった。失脚から一年後の一九七一年八月、北朝鮮を訪問したシハヌークは当時の金日成国家主席から歓待を受けた。金日成とシハヌークの親交は、一九六一年にユーゴスラビアのベオグラードで開催された非同盟諸国運動（NAM）首脳会議以来のものであった。一九六五年、二国間の協調関係を確かなものにするた

め、シハヌークは北朝鮮を初訪問した。後に、金日成はシハヌークへの友情の証として専用の宮殿⁽¹⁾とボディガードを用意し、その亡命生活を支援している。一九七九年から一九九一年の間に、シハヌークは、ほぼ毎年、北朝鮮を訪れ滞在した⁽²⁾。

平壤に本拠を置く朝鮮通信社では、シハヌークと金日成の友好関係を次のように記している。「一九六五年四月の外遊で初めて会って以来、金主席は数十年にわたりに常に、紆余曲折に満ちたノロドム・シハヌークの人生を支え、後援しつづけてきた。米国に操られた軍事クーデターによりシハヌークが地位を追われた際にも、金主席は彼を北朝鮮に招き、温かい支援の手を差し伸べ、彼のもとを足繁く訪れてはカンボジアの国家的危機を乗り切る方策について語り合った。カンボジア国民による反米運動が勝利を収め、ノロドム・シハヌークは母国へ帰還したが、後に再び亡命することとなった。この際にも金主席はシハヌークを擁護し、一刻も早く母国で正当な地位を取り戻すことができるよう援助を惜しまなかった」⁽³⁾。

最終的にシハヌークは、当時の中国指導者たちとの緊密な個人的交流を理由に、長期にわたる亡命生活を中国で送ることを選んだ。シハヌークと当時の中国首相・周

周恩来は、一九五五年に開催された非同盟諸国によるアジア・アフリカ会議（バンドン会議）をきっかけに親交を結んでいた。その後、一九五六年二月に周恩来の招聘により北京を訪れた際、シハヌークはさらに当時の国家主席・毛沢東をはじめとする多くの中国指導者たちの知遇を得ることとなった。この訪中は多に歓迎され、滞在中は最後まで周恩来が自ら案内役を買って出た。そして同年一月には周恩来がカンボジアを訪れ、この期間中に中国とカンボジアは平和的共存の原則に関する共同声明を採択した。

以来カンボジアと中国は、より強固な友好関係を着実に築きあげていく。一九五八年七月、カンボジアと中国の間に正式な国交関係が樹立されたひと月後、シハヌークは外交代表団を率いて訪中、周恩来首相の案内で中国各省に足を運んだ。またこの時期に、中国政府はカンボジア支援計画にも着手している。一九六〇年四月、シハヌークの父であるノロドム・スラマリット国王が逝去。周恩来首相は中国政府を代表してプノンペンを訪れ、国王の葬儀に出席した。同年二月、シハヌークはカンボジア国家元首の立場で北京を訪問、両国間で友好相互不可侵条約が締結された。

シハヌークの相談役兼個人秘書

を長年にわたり務めたフリオ・ヘルドレスは、周恩来とシハヌークの間の友情を「たぐい稀で」「特別で」「驚異的で」「感動的」だと表現している。周恩来首相は、非の打ち所のないもてなし役としてシハヌークを後援した。一九七〇年カンボジアのクーデタの後、周恩来は王位を追われたシハヌークを迎える準備を始めた。中国政府から特権的な客人として歓待されたシハヌークには専用の住居が用意され、会いたいと願う人物には誰とでも面会する機会が与えられた。周首相は、中国国内のマスメディアに対して、シハヌークのメッセージや談話がカンボジア国民に伝わるよう広く報道することを指示するとともに、特に中米関係の進展などに関して頻繁にシハヌークに報告した。しかし友人である周恩来による温かいもてなしにも関わらず、シハヌークは往々にして、この亡命生活に打ちひしがれ屈辱を感じていた⁽⁴⁾。

一九七三年の中頃から、周恩来は、クメール・ルージュ指導者による独裁を阻止してカンボジアにシハヌーク主導の連立政権を誕生させるため外交キャンペーンの陣頭指揮を執った。しかし一九七五年、カンボジア内戦の勝利でクメール・ルージュ政権が誕生すると、シハヌークに政治的権限が与えられないことはなく、この政権の

もつてシハヌークは三年間の自宅軟禁生活を強いられた。一九七五年八月、周恩来はクメール・ルージュの指導者たちにシハヌークとの協調を勧告するとともに、こう警告している。「我が中国共産党は、我々自身の過ちによるこの悲惨な結末の責任を負う。我々は、貴政権がその大きな躍進を以て共産主義の最終段階へと向かう試みを、敢えて留まるよう進言する。共産主義への道は、細心の警戒を怠ることなく、時間をかけ、持てる英知を駆使しつつ進むべきものだからだ」⁽⁵⁾。

シハヌークとクメール・ルージュ指導者たちとの緊張関係が続いた時期、周恩来はシハヌークを支持し、仲裁の介入を試みた。一方シハヌークは周恩来に対してこう感じていた。「周恩来は真の友達だ。高級官僚の家に生を受けた周は、友情を尊ぶ中国古来の伝統を自ら実践している」⁽⁶⁾。

中国訪問と滞在の期間中、シハヌークは、毛沢東国家主席と幾度か面会している。周恩来との間に築いた関係ほど親密なものではなかったが、毛主席との間にもまた友情が育まれた。毛沢東生誕一〇周年を祝う談話のなかで、シハヌークはこう語った。「世界の歴史上、最も尊敬され賞賛される偉人の一人である毛沢東主席の名は、決して消えることなく、永遠

に人々の記憶に残るだろう」。記念式典の最中に受けた中国国営新华社通信のインタビューで、シハヌークは、毛沢東が中華人民共和国の建国に果たした貢献の偉大さに触れ、こう述べている。毛沢東は「中国数千年の歴史のなかで最も偉大な英雄」であり、封建主義、植民地主義、帝国主義から中国人民を解放し「中国を独立と団結と権威のある国家へと育て上げた」のである。

シハヌークは、国家指導者たちのみならず、中国の様々な世代の人々から尊敬され愛されてきた。シハヌークが数々の国際問題に関して中国のために行った支援と、二つの国家とその人民の間に築き上げた協調関係について、中国国内の評論家たちは常に高く評価してきた。一方シハヌークは、自ら作曲した歌「ああ中国、我が第二の故郷」を通して、中国と両国の間に育まれた友情に感謝の意を表している。

長きにわたる亡命生活にも関わらず、シハヌークは、その精力的で衰えを知らない政治活動により、カンボジアの自由と自主独立を絶えず国際社会に訴えつづけた。一九七九年一月のベトナム軍侵攻によるクメール・ルージュ大量虐殺政権の終焉を喜ぶ一方で、ベトナムによるカンボジア占領に抵抗して党派を超えた政治的、外交的運

動を展開した。一九八二年、亡命中のシハヌークは、自身が率いるフンシンペック党、民主カンプチア党、クメール人民民族解放戦線の三派連合から成る民主カンプチア連合政府の大統領に就任した。亡命連合政府の調印式は、一九八二年六月二日にマレーシアのクアラ Lumpur で執り行われた。

さらにシハヌークは、一九九一年のパリ和平協定を通じてカンボジアが平和を取り戻すプロセスにおいても中心的な役割を担った。この和平協定は、一連の非公式会談、特に一九八八年から翌八九年にかけて行われたジャカルタ非公式協議を経て実現したものであり、この協議の結果、カンボジア四派と国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)の平和的合意への道が拓かれ、最終的には一九九三年にUNTACの指揮下で実施された総選挙の実現へとつながった。

総選挙後の一九九三年九月二四日、シハヌークはカンボジア国王としての地位に再び返り咲く。しかし自身の健康上の理由により二〇〇四年一〇月七日には再び退位し、王位を息子のソムダッチュ・プリアバロムニアット・ノロドム・シハモニに譲り、国王と同等の免責特権を有する王父の称号を与えられた。退位後のシハヌークは健康診断と持病の治療のため北京をたびたび訪れた。そして二〇一二年

一〇月一五日、シハヌークは、滞在中の北京で九〇年の人生の幕を閉じ永眠した。シハヌークが遺した功績は数多あるが、何よりも、その存在はカンボジアに独立と統一、団結と繁栄をもたらした尊敬すべき指導者であり国民的英雄として評価されている。カンボジアでは、シハヌークは人民のための「穏やかな木陰」のような存在であるといわれている。

中国での最後の滞在中、シハヌーク夫妻は、中国当局により様々な国家行事に招待された。一九九九年四月三〇日の昆明世界園芸博覧会開会式、二〇〇八年の北京オリンピック、さらに二〇〇九年一〇月一日には中国建国六〇周年記念祝賀祭でも、夫妻は様々な行事に出席した。シハヌークが中国政府の首脳陣とともに天安門城楼に上った回数はいくつに六回を数えるが、これは外国国家元首のなかで最多となっている。

中国国民には、カンボジア国家のことよりもシハヌークについてよく知られている。国家の大切な旧友として歓迎されたシハヌークは、中国各地の自然災害被災地を何度も訪れては私財を寄贈した。滞在中、中国政府の幹部たちと頻りに会合を持つ一方で、シハヌークは故国カンボジアの人民とも精神的なつながりを持ちつづけた。さらに晩年には自身のウェブサイ

ト(<http://www.norodomshankou.com>)を通して数々の談話を発信した。一九五〇年代半ばにシハヌークと中国指導者たちとの間に育まれた友情は、その後も絶えることなく、現在の第五世代中国指導者にまで引き継がれているといわれる。シハヌークは、中国とカンボジアの人民を結ぶ架け橋となってきた。その亡命生活により、シハヌークは両国の間に確かな信頼と友情を築きあげたのである。

シハヌークの例が示すとおり、アジア外交の鍵を握るのは、人間関係と人脈である。シハヌークと周恩来の間の友情は比類なきものであり、永遠の友や敵など存在せず、あるのは永遠の利害関係のみ、という世間一般の普遍的な考え方とは相反する。真の友情は確かに存在し、いかなる状況においても重要である。カンボジアと中国が育んだ友情と二国間の関係は、その好例だ。両国の友好関係は、まさにシハヌークと周恩来が築いた友情の産物なのである。亡命生活とは、政治的な実験であり苦難であるのみならず、真の友の存在に気づかせてくれる絶好の機会でもある。

(Chheang Vannarith / アジア経済研究所 海外客員研究員)

(1) 一九七四年、金日成は、亡命中のカンボジア指導者ノロドム・シハヌークのために邸宅を建設した。朝鮮様式の屋根を頂く四〇部屋の豪華な邸は、シャンデリアが輝く高い天井が目目を引く。邸の中心にある宴会場は、シハヌークが折にふれ他国の外交官たちをもてなす社交場となった。内装は金日成自身の住宅をモデルにしたとされる。緑豊かな丘に囲まれた人口湖「長寿の湖(Changsuwon)」を見渡す敷地内には、シハヌーク専用の仏教寺院と体育館も用意された(<http://www.hiddenhistory.info/exChangsuwon.htm>)。

(2) シハヌークの思い出: 金日成の「カンボジア冷戦協力者」(トム・ファレル) N.K. News 二〇一二年一〇月二〇日 <http://www.nknews.org/2012/10/remembering-shankou-kim-il-sungs-cambodian-cold-war-collaborator/>。

(3) 「金日成とノロドム・シハヌークの兄弟愛」(朝鮮通信社) 二〇一二年一〇月二三日 <http://www.kenaco.jp/item/2012/201210/news23/20121023-21ee.html>。

(4) 「私が見たノロドム・シハヌークと周恩来: 冷戦の片隅で育まれた驚くべき友情」(フリオ・A・ヘルドレス二〇一二年) Cross-Cultures: East Asian History and Culture Review 第四号 (二〇一二年九月号) 五二―六四ページ。

(5) ヘルドレスの寄稿 (二〇一二年) 六一―六二ページ。

(6) ヘルドレスの寄稿 (二〇一二年) 六一―六三ページ。